

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2014年 冬号 1月8日発行 通巻51号

発行人：竹内 章（府中市分梅町）

TEL 042-364-3428

盛況だった「田んぼの学校2013」



①開校式・田植え(5/26) ②草とり・生き物探し(7/6) ③稲刈り・ハサかけ(9/28) ④脱穀・粃摺り(10/12) ⑤収穫祭・修了式(11/17) の第8回田んぼの学校の全行程が盛況裏に終了。昨年の経験をふまえて、「田んぼの学校2014」の計画がそろそろ視野にはいつてくるころである。写真左は①の田植えの様子。右は③の赤ちゃんを背負ったお母さんの稲刈りの様子。2面(脱穀・粃摺り)、3面(収穫祭・修了式)に関連記事あり。

多摩川はオモシロイ

～身近な自然と水辺の環境～

主催／東芝ソリューショングループ

後援／府中市(環境保全活動センター)

講師／中本 賢氏

日時／2013年12月3日(火) 18:00～19:45

会場／府中グリーンプラザ けやきホール

私は中本賢氏が俳優であることをしらなかった。1985年に多摩川近隣への転居を機に多摩川の自然のオモシロサにはまったとのこと。司会者から紹介をうけて壇上に立つと、「今日は、多摩川の自然を自由に語ってよいといわれている！こんな楽しいことはない！」と満面の笑みを浮かべる。エピソードは尽きない。(川べりのマンションには景観、川風の妨げになるなどの環境問題はあがる)その自宅から息子と二人でシュノーケルをつけてエレベーターをおりて、住民に白い目で見られた。多摩川べりで這いつくばってアユを観察していたら、土左衛門と間違われてパトカーがきた。遊泳禁止のところまで潜って魚を観察していたら警察に通報された等々。また、多摩川の小動物、特に狸との交流もあった。当時、小学生の息子さんの横に狸が大人しくしている写真。

汚染されてピンク色、黄色、緑色になった中国の川の写



真。しかし、日本でも45年前の多摩川は白色だった。その泡が東横線電車の窓につき、近くの家の洗濯物にもついた。その頃は魚の奇形が多かったが、自宅の水槽で飼育していた奇形の魚が産卵する姿に泣くほど感動したそうだ。

中本氏はときおりQ&Aを交えた。たとえば鯉

の産卵は4月～5月頃であるが産卵箇所はどこが一番好まれるか？ ①レジ袋②モップ③ブルーシート。すべて多摩川に捨てられているゴミであるが、正答は①のレジ袋である。鯉はヒラヒラしたものを好むそうだ。このような発見はたぶん鯉の習性として魚図鑑には書かれていないだろう。座学からは決して生まれず、実際の長期の観察から生まれるものである。少年の心を持った好奇心がなければ、ここまでは観察できないであろう。

現在は下水道化率も飛躍的に向上し、多摩川にアユが戻ってきているという。環境問題は身近な自分の住んでいるところから始めよ、という最後の言葉。その言葉に意を強くした。(葛西利武)

好天に恵まれた 田んぼの学校

脱穀と籾摺りの巻

絶好の脱穀びより

第4回田んぼの学校、脱穀・籾摺りはとてもよいコンディションのなか行うことができました。天気はとてもよく、雨が降る心配もなければ、強い風も吹かず、熱中症の心配をするほどの高温でもなく、絶好のイベント日和となりました。また、生徒の参加は数名の欠席者が出たものの、ほぼ全員に近い参加で盛り上がりました。

二つの反省点

さて、今年の脱穀・籾摺りは実験用の小型脱穀機、籾摺り機を使って行いましたが、二つの反省点を残しました。一つは脱穀・籾摺り作業中に、モミ殻やワラ屑等のゴミ受けにビニールシートを機械の下に敷いたのですが、シートが小さくシート外にも飛び散ってしまいました。作業終了後掃除をしましたが、結構大変な後始末になりました。来年からはブルーシートを増やすなどの対策が必要でしょう。もう一つは籾摺り機のことですが、作業前半はうまく動いていましたが、一時、モミが詰まり作業を中断することになりました。今年から新しい機械になり、一通り操作方を教わったが不慣れは否めない事実で、今年の苦い経験を繰り返さないため操作の習熟も含めて、トラブル時の対処法をマスターしておく必要を感じました。



▲脱穀機の使い方を教えるかんきょう市民の会スタッフの竹田さん
機械操作に興味しんしん

一方、参加した子供たちにとっては、様々なことを体験してみたいという欲求を満たすことができたという意味で有意義な体験となり、特に反省すべきことはないように思います。作業前のびよびよさん体操でも、積極的に、みんなの前に出てムードメーカーになる子がいました。前回までは親やスタッフに誘われ仕方なく…という感じでしたが、今回の田植えの時のびよびよさん体操と比べると、一段といい雰囲気でした。また、脱穀機・籾摺り機の説明の時も、みな真剣になってスタッフの説明に耳を傾け、じっくりと二つの機械を見つめていました。小学生になると、細かい説明は嫌がるものですが、そのようなこともなく、静かに聞いていました。実際に脱穀・籾摺り作業に入ると、“早くやら

やらせてくれ”といわんばかりに機械の前に並び、真剣な表情で作業に取り組んでいました。脱穀機を体験した後、籾摺り機を体験し、また脱穀機を体験するなど、何度も挑戦する子もおり、積極性が窺えました。様々なことに挑戦したいというその姿に、田んぼの学校のスタッフとして嬉しく思いました。



▲籾摺り機の使い方を教える私

子供たちが田んぼで生き生き、 学生スタッフの意義

僕は「ほっこりクラブ」に属していますが、今年はサークル「耕地の会」の学生も田んぼの学校に加わったため、子供たちにとって、お兄さん、お姉さんが増え、とても楽しいものになったと思います。今回は特に、「耕地の会」の参加者が多かったため、より一層、楽しいものになりました。作業が一段落したあと、大学生と“くつつき虫(正式名はオナモミ)”を投げ合っている子供たちはとても楽しそうでした。脱穀・籾摺り作業のなかでの真剣な表情とはまた違った、最も子供らしい表情でした。大学生の参加が少なかった時にはなかなか見られないものでした。

大学生スタッフは、子供たちを「楽しませる」には貴重な存在です。その理由は、大学生スタッフと市民の会スタッフとの年齢的な問題です。大学生スタッフの年齢が子供たちと近い分、子供たちとの感性が近く、より親しくすることができます。

しかし、大学生は4年か6年で卒業するため、新しく参加する学生スタッフの確保がままならない現状です。子供たちに「楽しさを演出」する体験の場にするには、年齢も近い学生スタッフの存在は欠かせません。教育的に「有意義」なイベントを目的とするのであれば、大学生スタッフは必ずしも必要でないかもしれませんが、大人の「楽しさ」だけではなく、田んぼで遊ぶ子供の「楽しさ」を求めるには大学生が参加する仕組みづくりが課題です。

両方の協力があれば、充実した田んぼの学校になること請け合いです。大学生スタッフと市民の会スタッフは、補完関係にあるといってもよいのではないのでしょうか。

(佐藤 快 東京農工大学 生物生産学科4年)

そして、収穫祭と修了式の巻

5月26日に始まった平成25年度の『田んぼの学校』。学校の締めくくりとなる収穫祭が、11月17日(日)、市内の中央文化センターで開催されました。

今年の『田んぼの学校』は、全体を通じて参加を申し込まれた方の出席率が高かったのが特徴ですが、この日も45名の登録者中43名、その家族の方が67名参加し、朝から雰囲気盛り上がっていました。



また、盛り上がりに一役買ったのが、生徒、保護者、スタッフのご活躍です。演壇の花は生花店(購入)からの手配を止め、みんなに持ち寄りを呼びかけたところ、緑や花の少ない時期、草丈の長い皇帝ダリア、コウヤマキ(常緑)やカラスウリ、菊や葉ランなど持ってきてくれました(写真左)。東京農工大学からは、大里耕司先生指導のもと学部生・大学院生のみなさんにスタッフも参加してもらったほか、さわやかに甘い乳酸菌飲料もご提供いただきました。

さらに、出席児童の父母のみなさんにも、会場の飾り付け、収穫したお米でのおむすびづくりや豚汁調理、配膳作業に至るまで関わっていただき、まさに、出席者が一体となった手づくりイベントとなりました。

そして子どもたちも、各々にまとめた稲の成長観察記録の掲示、おむすびづくりに大奮闘したおかげで予定より早く準備が終わり、午前11時半には、高野律雄市長・小山有彦都議を招いての収穫祭がスタートしました。

食べることの待ちきれない子どもたちが、おいしく食事を頬張ったあとは、出席者のみなさんに書いていただいた感想文の発表タイム。「将来は田舎で農業をやろうと思っている」「これからもお米を大切にしたい」といった子どもたちからの声に加え、大人の方からは「田んぼに入ると、我

今年度は数人の大人の申し込みがあり、参加年齢層が広がるなど、従来からの変化もありました。農作業の大切さをアピールするとともに、高い公益的機能を持つ田んぼがあることで維持されて来た水辺環境や生態系の重要性、及びそれを保全する意義を、どう将来にわたり継承させるか。新たなテーマが浮上した今回の『田んぼの学校』だったといえるのではないのでしょうか。



▲田んぼの学校でとれたお米で作ったおにぎりや豚汁等での食事



▲修了証授与式、緊張してます

を忘れて楽しんだ。ぜひ『田んぼの学校』を継続してほしい」との意見も出ました。

高野市長が収穫祭の開会あいさつで、「農地の大切さをみんなに知ってほしい」と述べられていましたが、では子どもたちや子育て・仕事に追われているみなさんが農業を体感できる機会がどれだけあるかといわれれば、思いのほか少ないのが現実です。農家の側にも、普段縁の薄い市民の方々を農業ボランティアとして受け入れることに、躊躇される向きがあります。

そうしたなか、東京農工大学のサポートにより、田植えから収穫まで体験できる『田んぼの学校』は、たいへん貴重な、そしてネットワーク型NPOである『府中かんきょう市民の会』ならではの企画といえます。



収穫祭は、3人の女子児童のリコーダー伴奏に乗せての『ふるさと』合唱で大団円となりました(写真上)。みなさま、お疲れさまでした!

(西宮幸一)

ソーラータウン府中 見学記



▲コミュニティのなかで太陽エネルギーを利用した「ソーラータウン府中」。小径には雨水利用の手押しポンプも。(府中市美好町2丁目 東芝南門前)

このような街に住みたいと思わせる雰囲気の家並みだった。府中市美好町2丁目、東芝南門近くの全16棟の太陽エネルギーを利用したエコ住宅見学会を「広報ふちゅう」で知り、昨年9月に参加した。

地球温暖化に対応するため各メーカーが太陽エネルギーの有効利用に力を入れている昨今、その利用システムについて素人の私には認識を深める一助となった。

まず、この土地は都有地で民間に売却するにあたり、どのような街づくりを企画するかで公募し、相羽建設(あいは)が落札した。

その概要は、約2150㎡の敷地に16区画の木造住宅を建設するにあたり、単に太陽エネルギーの使用にとどまらず、この地区を一つのコミュニティと位置づけ、各住宅の塀をつくらず、南北に空地を設け、樹木を植えて風通しのよい住環境を作っている。

では、どのような住宅なのか。まず、住宅は木造で長く使える環境に優しいことが基本コンセプトで、使用する木材は、この地に適している多摩の森林産品を利用している。

屋根裏、壁面とも国内有力メーカーの断熱材を十分に使い、夏冬の温度の調整を考えている。また、基礎はコンクリートなのだがあとで述べるOMソーラーシステム(暖房、発電、給湯、換気)のうち、床下の換気が特徴で、特に冬場の寒さ対策が素晴らしい。

OMソーラーシステムとは太陽光発電とともに太陽熱利用で得た熱を室内の給湯・風呂に利用し、床下を含む家全体の換気にも役立つという多目的な仕組みと説明されている。

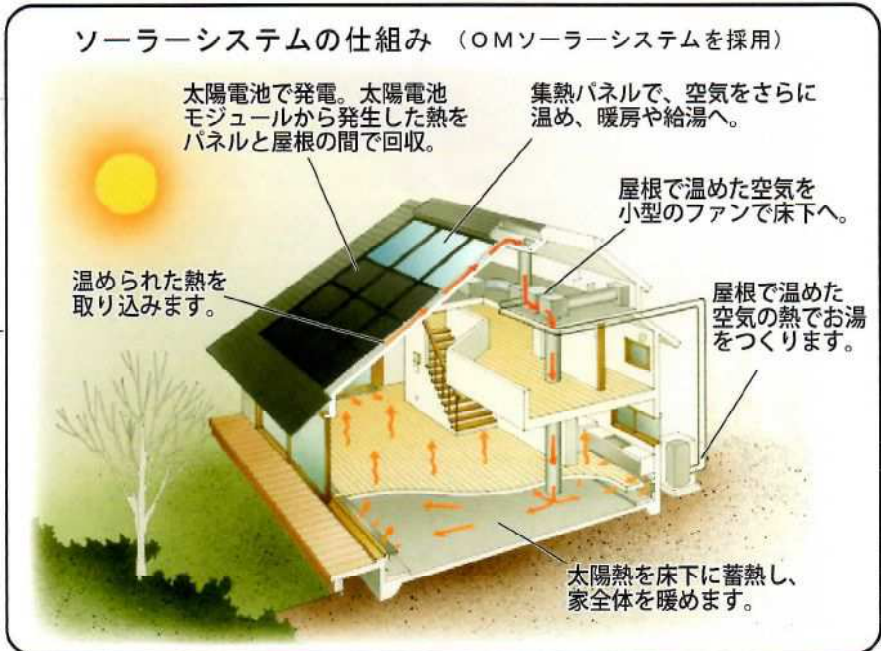
具体的な電気代、ガス代については、電力は余った分を電力会社に売却する契約が出来ており、季節によって異なるが、使った電力を上回る余分の電力が見込まれ、また常時50℃の給湯が可能なおかげで、ガス使用の節約も計られ、ガス代の低減に、大いに役だっている。

住宅の間仕切りについては、全ての床はフラットでバリアフリーとなっており、それぞれの部屋の壁は天井からの吊引き戸となっているため、家族構成の変化や、または車椅子使用にも充分対応できている。

屋外については南北に「小径」を作り、風通しもよく、樹木も植えられ、住宅もジグザグに配置され、あたかも公園のなかにいるような感じに仕上がっている。この「小径」の地中には雨水貯水タンクも設置されており、断水時には手押しポンプで汲み上げ、生活用水として活用できるので、防災にも役立つ。

今回の見学で得たのは、単に太陽エネルギーの利用という視点だけではなく、コミュニティ作りのなかでの住宅のありかた、温暖化対策を総合的な街づくりのなかで考えるというモデル提案として受け止めた。ちなみに分譲価格は1戸あたり5500～6000万円という。

(高橋和夫)



楽しかったNPOまつり



府中NPOボランティアまつりが2013年11月16～17日、賑やかに行われ、府中かんきょう市民の会も16日、グリーンプラザ6階の子供の広場で「親子で紙飛行機を作ろう」の看板を掲げ

て店開きをしました。当日は混雑もあまりなく子供達はゆっくり飛行機作りを楽しんでいました。

親子で飛行機を仕上げているニコニコ笑う子供、その場で飛ばして大喜びする子供、飛ばし方を習って遠くまで飛ばして自慢げにあとを追いかける子供など、たくさんのニコニコ顔を見ていると、教える我々も自然に笑みがこぼれて時間を忘れてしまいます。午後3時ごろには約100機を作り終了です。

このNPOまつりも今年11回目を迎え、47団体が参加する市民手づくりのまつりに成長してきました。各団体とも独自の催し物を自分達で企画して熱心に活動をPRしているのを見るにつけ、市民活動が次第に根づいてきている印象を強く受けます。主催者の「NPOボランティア活動センター」も確かな手ごたえを感じていることでしょう。このまつりが、さらに市民に認知され、楽しみなイベントになっていくよう我々市民の会も積極的に参加していきたいものだと感じた1日でした。

(羽尻元彦)

第24回 府中市農業まつりに参加して

快晴のもと、府中市農業まつりが2013年11月16日、郷土の森で開催されました。

私は府中かんきょう市民の会の援農ボランティアの1人として、清水、柿本、渡部、加賀さんと参加しました。まずはスタンプラリーのチラシ、景品(精米、ビンゴカード、ヒマワリの実)の準備、そして来客者の対応などを行いました。

開会式は野菜の宝船・花のピラミットの前で行われました。市長や、都議、市議らが並んだなかで、主催者代表の農業委員会会長はあいさつで、農業・農地保全の支援を訴えました。

都市農業は都市計画法が定めた宅地提供の役割は終わり、新鮮で安全な農産物を提供するだけでなく、市民に憩いの場、景観、防災、教育学習体験、交流・リクリエーション等の多面的機能の発揮に向けて、ニーズに応じて多様な取り組みを継続的に実施していきたいと述べました。

しかし現実には農地は減少の一途を辿り、明るい未来を展望することは困難で、われわれ市民の会が「農地・農業保全研究会」を立ち上げたのも行政任せでは済まされないとの思いからです。

この農業まつりは、農業者と市民とのふれあいを深めるのが最大の目的なので、そういったコーナーの設置…例えば、援農ボランティア、体験農園相談などを希望していたのですが、今後に期待し



たいと思います。

仕事の合間を見て、会場の各ブースをのぞき、府中東高校のハチミツや、詰め放題の静岡のお茶を求めました。品評会展示では、わたし達の「畑の学校」の産物と比較し、私なりの評価をしました。写真展示コーナーでは府中東高校のクラブ活動と資源循環型モデル事業のPR写真に興味を持ちました。生産物だけでなく、加工品の展示・販売コーナーも欲しいところです。援農ボランティア先の農園主の産物が出展、販売されていなかったのが残念でした。(竹田 勇)

府中市 環境保全 活動センター

府中用水の源泉を訪ねるツアーを開催

この企画は近隣を含む「府中市に残された自然を市民に広く紹介し、改めて自然の良さを知っていただくとともに、皆で大切に保存していきたい」との想いで開催したもので、今後シリーズで開催することにしたものです。

今回の企画は「府中かんきょう市民の会」の会員が当府中環境保全活動センターのサポーターとして多数会員登録している関係で案内役を務めました。

昨年11月21日、好天に恵まれJR南武線「矢川駅」に集合した参加者は34名（一般市民23名、センターサポーター6名、府中市職員3名、国立市職員2名）。コース案内などを受けて、最初の目的地「矢川緑地」を目指し、南武線沿いに歩くこと15分で到着しました。

国立市職員の案内で緑地内を散策、至る所に湧水が湧き出ており、矢川の源泉らしい雰囲気を感じ取れる場所でした。この緑地は「東京の名湧水57選」にも選定されており、現在は都の管理地です。国立市は特に管理には関わっていませんが、市民ボランティアが維持管理に携わっており、緑地内は良く整備されていて武蔵野の雑木林がそのままの姿で保存されていました（写真右上）。

緑地内を約15分ほど散策してから「矢川」に沿って歩き、次の目的地である「ママ下湧水群」に到着。

「ママ下湧水群」は青柳崖線の下にあり、付近一帯の数カ所の湧水口から湧き出ており、ここも「東京の名湧水57選」に選ばれています。水量もかなり豊富で、流れ込む清水川には清流にしか見られない「ナガエミクリ」（水草ミクリの仲間）が自生。環境省のレッドリストにも掲載されている「ホトケドジョウ」が生息する「清水川」の名にふさわしい清流でした。

▼青柳崖線下の遊歩道に行く参加者



「清水川」と「矢川」が多摩川の取水口から流れてくる「府中用水」と合流するこの場所は、昔から「矢川おんだし」と呼ばれ「府中用水」の水量も増加し、水草も豊富でした。再び「矢川」を遡る形で矢川沿いにある「滝乃川学園」を通り、「南養寺」を経由して「城山公園」で10分ほど休憩して、さらに府中用水沿いに歩き、「天神橋」を経由して「谷保天満宮」に入り、やはり「東京の名湧水57選」に選定されている「常盤の清水」を見学しました。

「谷保天満宮」内には「天神池」と呼ばれている湧水も湧き出ており、流れ出た湧水で近所の住民が野菜を洗っていたのが印象的でした。

ここで、国立市の職員とお別れして、つぎの目的地である西府崖線にある「西府町湧水」を目指しました。途中、府中用水沿いを歩きながらセンターのサポーターでもある当会の進藤禮治郎氏から、水田耕作が終わるまでの灌漑期

は用水路に水が流れず、下水道としての役目しか果たしていないことが残念…などの説明がありました。

また、用水路が大山道を横切る「神坂橋」附近から、西府崖線附近一帯の懐かしい昭和30年代の風景写真を見ながら、時代の変貌に皆感慨無量のような様子でした。

最後に、府中市で「東京の名湧水57選」に唯一選定されている「西府町湧水」を訪ねました。センターの運営委員でもある、当会の理事長から年間の湧水量や水質調査結果などについて資料を配布して、当会の湧水の監視活動について説明しました。

（竹内 章）



府中市が検討する『アドプト制度』って、なに？

『アドプト(Adopt)制度』とは、アメリカで始まった取り組みです。企業や市民団体、ときには市民が、道路・公園といった公共空間に関して、そこを管理する行政



▲西府崖線の清掃活動でのゴミ/あずまや前

と、清掃のエリアや回数などに関する覚書を締結し、管理者の支援のもと清掃・美化活動を担うシステムのことです。公共空間の「里親=Adopt」となってそこの手入れをする、といったイメージから、この名があります。

なお、行政によるサポートは、活動保険の加入、集められたごみの回収、里親(団体)名を記したサインボードの設置などです。里親が、花植え・飾花といった独自の工夫をできるように約束しているケースもあります。

館浩道編集長の後を引継いで

仕事をやめて、ボランティア活動をしたいと思っていた。そのおり、竹田勇さん主宰の「援農ボランティア」を知り、それに加わったのは2010年7月のことである。その後、「府中かんきょう市民の会」に同年10月入会した。

「西府崖線保全活動チーム」が、2011年4月から再編成されたのに伴い参加した。新チームの立ち上げに際して広報活動が必要となり、私がビラづくりを担当した。

ビラづくりを引受けたはよいがうまくゆかず思案にくれていた。そのとき、竹内章理事長から会報の編集長・館浩道さんに聞いてみたらというアドバイスをいただいた。館さんはパソコンにとっても詳しい方だった。

早速、専用ソフト(ラベルマイティ)を手に入れた。ついでにパソコンも買い替えた。しかし、ソフトの動かし方がわからずゼロからの出発だった。館さんには随分初歩的な質問をあびせた。それらのQ&Aをすべて印刷・保存し、練習に励んだ。そのせいかな今ではなんとか使えるようになった。

西府崖線保全活動のビラ創刊は2011年11月1日である。それから2年間ビラ作りと、会報作りの手伝いをしてきた。このような経緯で、館さんが今回偶然にも50号という大きな節目に退任となり、51号から新編集長という大役を引き受けることになった。私は館さんのように様々な環境問題に精通しているわけではない。編集長としての資質に自問するところはあるが、引き受けた以上は刻苦勉励の心境である。もちろん、編集作業には面白く魅力的な部分があるが、

アドプト制度の情報発信を進める「公益社団法人 食品容器環境美化協会」のデータによれば、我が国での導入自治体数は、平成25年4月現在で530以上にのぼっています。協働による環境保全活動である点が注目され、各地に実施の輪が広がっています。

府中市も、平成25年1月にまとめられた「府中市インフラマネジメント計画」で、導入検討の方針が示されました。活動を通じて地域への誇りや愛着を醸成する効果のあるアドプト制度の推進は、市民主体のまちづくり活動を市内に上げる上で、なるほど望ましいといえます。

ただし府中市の姿勢には、「インフラの管理コスト削減」ありきで、アドプト実施を急いでいる感があります。導入までのロードマップや活動ルールの詳細をきちんと詰めないまま、行政の都合優先で形ばかりの「協働」を市民に押し付けることのないよう、注視していく必要があります。

(西宮幸一)

▼2013年10月定例会終了後
竹内理事長から感謝状贈呈



一方では地味で黒子のような役割もある。執筆者の原稿がそのまま使えば楽である。しかし、ときには文章に手を入れ、アドバイスをしたりする。なにかの事情で原稿が手にはいらないときは、自分で書くしかないこともある。さらに、べ切日を過ぎた原稿には昼夜兼行の突貫作業が強いられることもある。

会報は年4回発行の季刊である。ここに作業の大体の流れを示す。企画会議→原稿集め→版下原稿作成→印刷所に持込み→会報発行→交換便等発送と定例会配布→HPに掲載→バックナンバー保存。したがって、読者に見える部分はおもに配布の時だけであるが、編集者はほとんど一年中関わっているようなものだ。根気がないと続かない作業である。

この会報は、質(記事の内容)、量(8ページ)ともに高いレベルである。この水準を維持できるかについては、プレッシャーも感じる。しかし、幸いにも、編集委員の方々が積極的に取組んでくださるので、そのサポートがあればなんとかできるのではないと思う。館さん、12年間ご苦労さまでした。今後は編集長のしぼりから離れて、世界を股にかけた自転車の旅をお楽しみください。(葛西利武)



韓国 軍事境界線を行く

Servas韓国という平和団体が、韓国の軍事境界線(DMZ)周辺を自転車で巡りながら、韓国と北朝鮮の平和や統一について考えてみないかと呼びかけてくれた。

朝鮮半島の軍事境界線(Demarcation of Military Zone 略称:DMZ)とは、半島上で韓国と北朝鮮の実効支配地域を分けている地帯の境界線で、俗に「38度線」と呼ばれている。1953年7月の休戦協定で決められたのだが、DMZには南北それぞれに幅2キロメートルずつの非武装中立地帯が設けられている。

10月初旬の早朝、ソウル市内の龍山駅からヨーロッパ並みの車内設備を誇る自転車専用車両に乗る。途中駅からも参加メンバーが次々と乗ってきて、メンバーとの挨拶も忙しい。ハルピンの中国人女性、日本から2人、それに韓国から15人が参加。サイクリングは美しい風景のウンガルサンをスタート。自転車道は歩道と完全分離され、レストラン、屋台、ホテル、貸しボートなどが並びリゾート地の雰囲気。途中の民俗食堂で伝統食チョンクッチャンの朝食。

ハンガンリバーサイクルウェイは廃線跡も利用して作られそのトンネルを3本抜ける。観光客でごった返している「冬のソナタ」のヨン様の聖地「ナリナラ共和国」を尻目に、州都チュンチョンでは美しい湖畔に朝鮮戦争で引き裂かれた姉妹の悲しみを歌った女性像が建ち、演歌が流れていた。

96キロ地点で38度線の碑を通過。休戦協定前に「北側」とされていた山に入り、オンドル式のしゃれた小屋でステーキパーティー。

翌朝も長距離のためライトを点けてスタート。冬は零下10度に下がる氷上での穴釣りができるハンガン上流を通る。長い長い浮き橋の上を早朝から散歩する人も。

斜度9度の10キロの長い坂道をゆっくり登る。標高651mのトンネルを抜けたら青空だった。眼下にハンガンが広がる。ハンガンは北朝鮮のクガン山が源で、立ち寄った「平和ダム」は一衣帯水の両国が戦争になればダムが破壊され、南北双方に被害がでる…だから平和をと、祈る場所になっている。世界各地の紛争地から空薬莖を集めて铸造された世界で3番目に大きいとされている鐘をみんなで衝き、鐘の前で記念写真(右、筆者は後列右端)。

2度目の峠を通過し、デッタヨンで、パスポートのチェックを受けてDMZを見学。実際はDMZの外だが、当時の戦いで北側が地雷を埋めたために「MINE」の警告と鉄条網

が張られている。兵士が要所要所で監視している。美しい溪谷は62年以上の無人地帯のなかで生き続け、野豚も棲息。当時の戦闘を物語る武器の残骸、ヘルメットなどが片隅にディスプレイされ、至近の山の尾根の向こうは北側だという。世界にまれなDMZの存在に納得。最近、朴大統領はこのDMZを南北共同管理の自然公園とするよう提唱しているという。

108キロ走って到着した宿では、ボイルした鶏肉を塩とレタスで楽しんだ。マッコリとともにワイルドだ。

3日目。大部屋で雑魚寝したオンドルは、この季節にしては暑かった。霧がかかり視界1キロのなかを出発。7キロばかりの長い登りにかかると霧が晴れて青空に。川沿いの美しいリゾート地帯を進む。雪岳山国立公園の入口を覗き、午後はチンブリアンの国立公園下山口の標高500mから東海の浜辺まで、豪快なダウンヒル。

夕陽を背にして東海へ。とある小学校の片隅に日本の二宮金次郎のような感じの少年の銅像を見かける。自宅に押し入れられた北のスパイに洗脳されそうになったが「共産主義は嫌い」と云って撃たれ、家族も虐殺された。小学3年生の名はイ・スンボク、韓国では反北朝鮮のシンボルという。夕方、100キロ走って東海の浜に到着。

最終日。プサンから北朝鮮まで続く国道7号線に沿って走る。この7号線に沿って統一実現後は高速道路で結ぶという韓国の計画のもと、すでに部分完成したり、工事中の現場を見ながら走る。国道7号線は緊急事態には仕掛けられたダイナマイトを爆破させ、巨大なブロックで道路を封鎖する備えもあり、まさに和戦両様の構えも見る。

7号線のどん詰まり。人家から遠く離れたところにDMZのチェックポイント。日曜日で次々と見学者が押しかけてくる。なかには、DMZの任務に就くMPに会いに来た家族もいて、徴兵制のもと、肉親同士が抱き合っている風景も。

高城統一展望台には統一宣言碑が建てられていた。北朝鮮を至近距離で望めるこの地に立って、朝鮮半島の統一を宣言し、その実現のために決意を新たにしたり、祈りを捧げる場所だ。

海岸部のDMZラインは国を二つに分断している様が明確に確認できる。小高い丘の上に韓国軍の監視所、はるか丘の上にも北朝鮮軍の監視所が…。天気の良いので、北側の美しい岩山が輝いていた(写真上)。 館 浩道

